

2021 年度一般選抜試験問題

小論文（課題）

注意事項

- 1 小論文の課題冊子には、課題と下書き用紙がある。白紙・空白の部分は下書きに使用してよい。
- 2 別に解答用紙1枚があり、解答はすべてこの解答用紙の指定欄に記入すること。指定欄以外への記入はすべて無効である。
- 3 解答用紙の所定欄に次のとおり受験番号を記入しなさい。氏名を記入してはならない。
なお、記入した受験番号が誤っている場合や無記入の場合は、小論文の試験が無効となる。
- 4 課題冊子は持ち帰ること。
- 5 解答用紙は持ち出してはならない。
- 6 試験終了時には、解答用紙を裏返しておくこと。解答用紙の回収後、監督者の指示に従い退出すること。

以下の文を読み、問に答えなさい。

つまり、何を材料にして自分を造り上げるか。広い知識や広い体験は決定的に大事な材料の一つですけど、全部ではない。造り上げるといって、いかにも何かがちがちに造り上げた完成品ができってしまうように見えますけど、そうじゃないんですね。自分というものを固定化するのではなく、むしろいつも「開かれて」いて、それを「自分」であるとみなす作業、そういう意味での造り上げる行為は実は永遠に、死ぬまで続くわけです。

もしかすると死んでからも続くかもしれない。その中で、一生をかけて自分を造り上げていくということにいそしんでいる、邁進まいしんしている。それを日常、実現しようと努力している人を、われわれは教養のある人というのではないか、そう私は思っています。

それを達成するときに、狭い局面に自分を固定してしまわず、開かれた形で臨むためには、やはり知識は決定的に重要でもあるのです。それは、心を解放してくれますから。いろいろな知識を身につけることによって、自分を造り上げようとする射程が広がるということはあると思うんですね。だから、造り上げていくプロセスの中で、いろいろなことができるか、ある限られた角度の中でしかできないかは、知識があるか、ないかで違ってくるんじゃないか。だからやはり知識というのは百パーセント大事だ。けれども、じゃあ知識がない人はいま言ったような意味での教養もないのかと言われたら、私は断然ノーと答えるということになりますね。

その意味で、実学と虚学という分類は、私は採りたくないんです。何事も実学なんです。自分を造り上げるために必要である、「役に立つ」という意味であらゆる知識活動、学問は「実学」です。ましてや文学というのが、文字通り実学の一つなんですよ。

だってそうでしょう。人間が一生に体験できる世界なんて、たかが知れている。しかし、文学が開く世界というのは、実体験を何層倍も広げてくれるではありませんか。それに文学というジャンルはものすごく射程が広いわけでしょう。詩も文学ですし、芝居の脚本も、小説はもちろん、紀行文も、場合によっては日記や書簡でさえも。それらが私たちに語りかけることは、自分を造り上げる作業にとって、どれほど「役に立つ」ことか。つまりは「実学」であることか。

村上陽一郎著『あらためて教養とは』2004年 pp. 187～188 新潮文庫より抜粋

問題 あなたにとっての教養とは何かを述べなさい。

下書き用紙

(下の矢印から横書きではじめること。)

1																			
5																			
10																			
15																			
20																			

(20×20)

(400字)